

# 「自分らしい」進路選択のためのコミュニケーション

～学生・企業に求められることは？～

## 学生の自分らしい進路選択には キャリア探索活動が必要

これまで『就職白書 ～学生と働く組織のより良いつながりに向けて～』では、新卒採用・就職における学生と企業のコミュニケーションの在り方を示唆してきた。さらに、昨年の『就職白書2023』では、初職の進路選択は、その後の人生への影響が大きいとする中で、それゆえに意思決定には困難がつきまとうこと、社会人になってからも自分らしい人生を送るためには、進路選択における「自分らしさ」が重要であることを確認した。その上で、進路選択において「自分らしさ（本来感）」に寄与するものを探ったところ、進路選択に至るまでの「自己探索」「環境探索」がカギを握るのではないかという結論が導かれた。

なお、ここでは「自分らしさ」を、自分の「個性」や「独自性」を見いだしながら進路選択をすること、あるいは「自分な

りの基準・軸」を体現しようとするのと捉え、心理学上の「本来感」も参考に定義している。

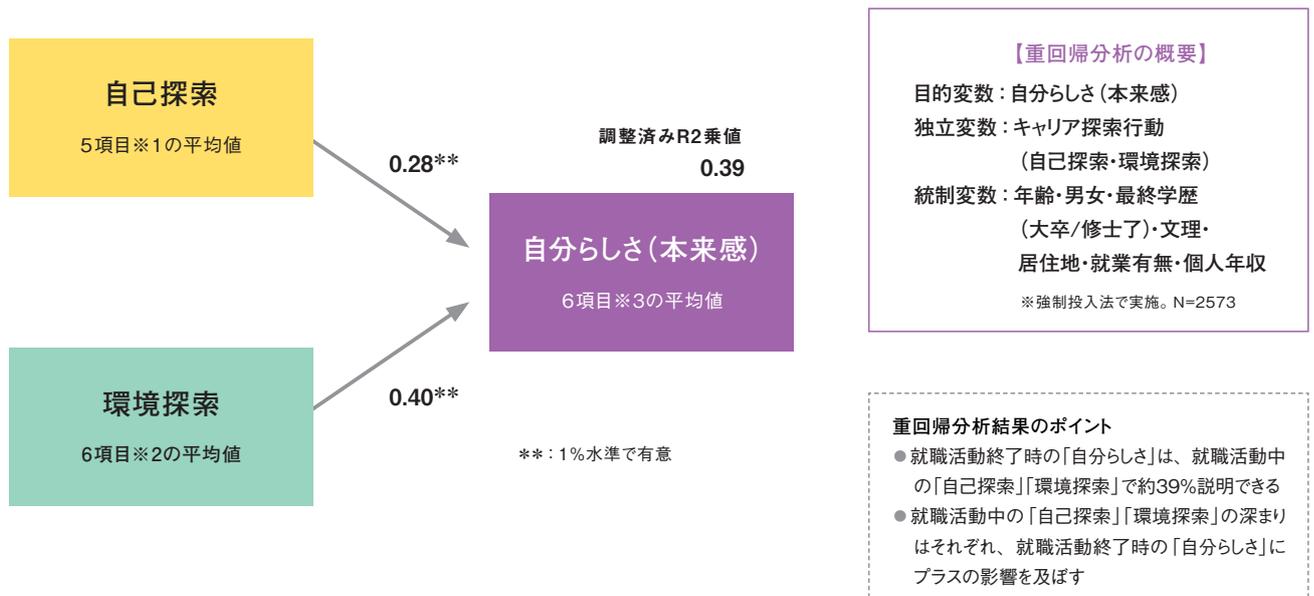
「自己探索」と「環境探索」に関しては、それぞれについて「自分らしさ」への寄与度を分析した。「自己探索」とは、自分の長所・短所や、これからの生き方などについて「自分のことを客観的に理解する」ことを指し、「環境探索」とは、「自分が知らない仕事や職業の世界を知るため情報収集や対話をする」ことを指す。

進路選択における「自分らしさ」に対する「自己探索」「環境探索」の寄与度について重回帰分析を行った結果は、図①の通り。「自己探索」「環境探索」のそれぞれが、就職活動終了時の「自分らしさ」に一定程度、プラスの影響を与えていることが示された。加えて、「環境探索」では、特に企業やロールモデルとなる社会人といった「外部」とのコミュニケーションを含めた「外部活動」が重要であるという視点を提示した。

社会人 就職活動中の「自己探索」「環境探索」の深まりは就職活動終了時の「自分らしさ」にプラスの影響を及ぼす

① 「自己探索」「環境探索」を説明変数、「自分らしさ（本来感）」を目的変数とした場合の重回帰モデル

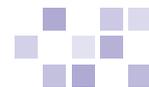
※大学卒業または大学院修士課程修了後3年以内の社会人



※1 自己探索尺度5項目のクロンバックα係数=0.90

※2 環境探索尺度6項目のクロンバックα係数=0.87

※3 本来感尺度7項目のうち、反転項目を除く6項目のクロンバックα係数=0.89



## 学生との対話の質向上が 企業に求められている

学生の環境探索、とりわけ「外部活動」を考えた場合、まず重要な位置を占めるのが、企業とのコミュニケーションである。このテーマについて、『就職白書』では、これまでも研究を続け、多くの示唆を行ってきた。そこで、ここでは、学生と企業とのコミュニケーション、とりわけ学生と企業における相互理解の深まりの重要性、情報開示の在り方について、再確認することにしよう。

まず、『就職白書2021～冊子版～』での分析を振り返ることとする。このときは、図②が表すように「採用選考時のコミュニケーション」が「企業の学生に対する評価」や、「総合的な採用満足度」に影響したという結論が得られた。さらに、「採用選考時の学生とのコミュニケーション」の深まりのためには、採用の準備や率直な採用情報の開示、企業

の自己省察が重要であることも示唆された。

ここから考察されるのは、学生の就職活動において、企業から開示された情報を取得することで相互理解が深まれば、面接など選考の場面での学生自身のアウトプットの質が高まるということだ。さらに、そのような学生は、企業から活躍イメージが湧き、評価もされやすいため、企業が採用を見極める上でも、精度が上がるのが期待できる。

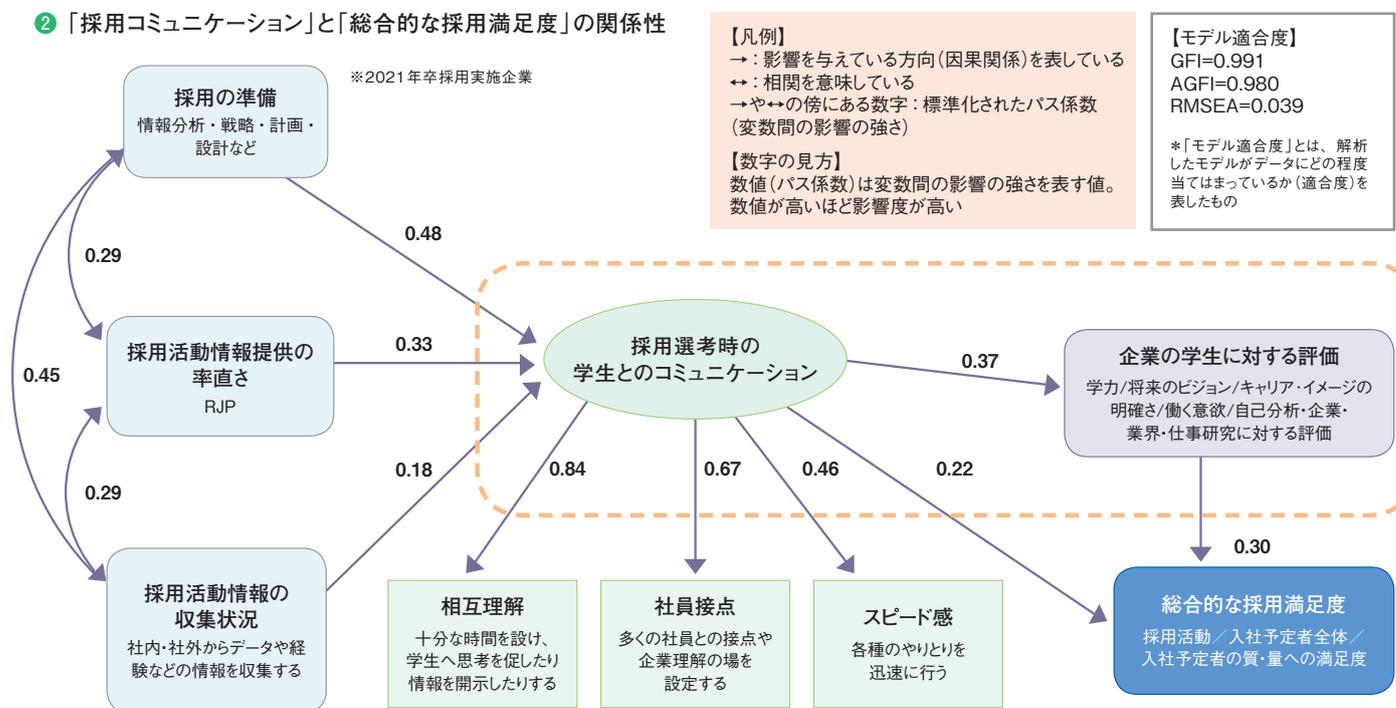
つまり、学生にとって、企業とのコミュニケーションが外部活動として重要な要素となるのと同時に、企業にとっても、学生との積極的なコミュニケーションが採用満足につながる。学生と企業が接点を持ち、相互に理解を深めることこそが、双方において望ましい結果を導くであろうことを、ここで確認しておきたい。

では、学生と企業は具体的にどのような行動、接点を通じて相互理解を深めていくべきか？ まずは、学生と企業のマッチングの現状把握から始めよう。

### 企業

「総合的な採用満足度」に影響を与えているのは「学生とのコミュニケーション」であり、「採用の準備」などに取り組んでいる企業ほど、「学生とのコミュニケーション」に力を入れている傾向がある

### ② 「採用コミュニケーション」と「総合的な採用満足度」の関係性



総合的な採用満足度に影響を与える因子を、採用プロセスの流れに沿ったモデルで分析した「パス図」。なお、「相互理解」「社員接点」「スピード感」は、「学生とのコミュニケーション」を構成する要素であり、パス係数が「0.84」と最も高い「相互理解」が、「学生とのコミュニケーション」を構成する要素として最も大きいと解釈できる。